

ハンセン病資料館 不当解雇学芸員を支援する会

ニュースレター
第3号

発行日：2021年5月21日

不当解雇された2名の学芸員の職場復帰を応援しよう！！

■ 争議支援総行動

日時：5月27日(木) 11:25～

場所：日本財団ビル前(港区赤坂1-2-2/東京メトロ銀座線「虎ノ門駅」徒歩5分)

日本財団ビルの前で抗議行動(アピール)を実施します。

■ 第5回調査後報告会

日時：5月31日(月) 15:00～

場所：新宿ファーストステージ会議室(新宿区西新宿3-1-3 西新宿小出ビル10F/JR「新宿駅」徒歩6分)

東京都労働委員会で実施される第5回調査(傍聴不可)の後、報告会を開催します。

東京都労働委員会審問・陳述書より

3月29日、4月5日東京都庁内で開かれた労働委員会の公開審問に参加しました。新型コロナ禍のため、別室で中継を見る形でした。

29日には、稲葉さん、大久保さん、それにもう一人の組合員の田代さんの審問でした。資料として分厚い3人の陳述書が配られました。5日は、日本財団の吉倉常務理事と笹川保健財団の南里常務理事の審問でこちらはさほど分厚くない陳述書が配られました。

3人の学芸員さんたちの毅然とした態度には、しっかり応援していこうと思われました。印象的だったのは、2つの財団の理事の方が別の組織と主張されているにもかかわらず、防犯カメラによる組合員の監視については、日本財団が始めたものを、笹川保健財団が日本財団から引き継いで続けていたと恥ずかしげもなく話していました。監視カメラについては、警察の指導を受けてなどと言っていますが(警察は財団の出した盗難の当日のもの以外は不要と言っています)、監視の記録は、「三人の動きについて」というチェックシートもあり、組合員に対する監視であることは明らかになっていると思いました。吉倉常務は、笹川保健財団に運営が変わるときに、「引継ぎに伴って業務に支障が生じることのないように」笹川保健財団の顧問になっています。委託団体の交代は二人を解雇するための茶番としか思えません。

大久保さんの陳述書には受けてきたセクハラ、パワハラについて克明に述べられていました。我が国の女性に対する差別的な習慣はまだ根強いとは思っていましたが、資料館の中の様子は予想を超えていました。が、その中でも様々な仕事をやってきているのは素晴らしい資質と思います。

解雇の理由として「洞察力やコミュニケーション力に欠けており・・・」とか「学芸員として即戦力となっているのか疑問」とか言っているのがいかに事実と違う身勝手な作文かは、田代学芸員の陳述書に詳しく述べられています。二人とも資料館の仕事には欠かせない学芸員です。

両団体が一体となって起こした不当労働行為であり、不当解雇であると確信します。これから先、労働委員会への働きかけには応援していきたいと思えます。

ご支援ありがとうございます！

署名約 **23,100** 筆 (ネット署名含む)

210 万円 を超えるカンパ

※4月末現在

ご協力に感謝いたします。

引き続きよろしく申し上げます。

【収支報告】2020年9月～2021年4月

繰越金 314,647円

収入 1,243,311円

支出 1,115,000円

※主な支出先：二人への生活支援、弁護士費用、通信費等

2020年

- 3/24 笹川保健財団が学芸員2名を不採用
- 3/27 全療協事務局長より笹川保健財団理事長と資料館事務局長に不採用の理由を質問
→未回答のため**不当解雇**とみなすと通告
- 4/15 笹川保健財団と第1回団体交渉
- 5/8 東京都労働委員会に不当解雇撤回の申立
- 9/2 東京都労働委員会第1回調査
- 10/15 東京都労働委員会第2回調査
- 12/1 東京都労働委員会第3回調査
- 12/3 日本財団・笹川保健財団前抗議行動

2021年

- 1/25 東京都労働委員会第4回調査
- 3/29 東京都労働委員会審問(1回目)
- 4/5 東京都労働委員会審問(2回目)

コラム 生きたあかしとしての資料

ハンセン病資料館を不当にも解雇された稲葉さん、大久保さんは資料館の学芸員です。

お二人に対する解雇は二重にも三重にも不当なものであり、到底許すことのできないものです。

ハンセン病に犯された元患者たち、それゆえ社会から抹殺されようとしてきた元患者たちの、それぞれ自分たちの「存在した」という記憶を自分たちの亡きあとと未来永劫残したい、自分たちが「病者」として生きた年月を忘れることを許さないというあまりにも切実な願い、それらを生かすことを自らの使命としてもつのがハンセン病資料館です。

そして残されたあらゆる記録とモノを生きかえらせ歴史を将来につなげる、それこそがハンセン病資料館の学芸員に課せられた(すでに亡き)何千人ものハンセン病患者から託された願いなのです。その重さにあえて手を挙げたのがハンセン病資料館学芸員なのです。

いまハンセン病資料館には全国の療養所から寄せられた膨大な資料が収蔵されています。

そのなかには全生園の入所者たちが残した資料も多数含まれています。

すでに閉鎖された自治会立ハンセン病図書館の一番奥に展示室が増設されていました。図書館運営の中心であった故山下道輔さんたちが文書記録だけでは不充分だ、自分たちの生活の記録、困難な状況のなかで生きるために工夫した生活用具も残さなくては、と多くの入所者の元から収集したものです。

山下さんとそれらの資料を見ているときさまざまな小さな生活道具が目につきました。これはどうしたのですか？と質問したところ、自分たちで工夫して作ったものだとの答えでした。ブリキの義足や竹でつくった松葉杖、不自由な手で少しでも使いやすようと工夫された食器など。みんな自分たちで作ったんだよ、腕のいい人のところでは作ってもらう順番を待っていた、とのことでした。

図書館の事務室に小さな引き出しの付いた本立てが電話の脇に置かれていました。裏には墨書で「昭和五年六月廿二日稲本大工贈」と書かれていました。入所者であった大工の稲本さんが同じ入所者の誰かのために作ったものでしょう。以来引き継がれて80余年、大事に使われて図書館事務室で現役を勤めていたのです。

博物館に収蔵された資料は全てそれぞれ固有の世界を持っているものですが、そこを何とか知りたい、生き返らせたいと思うのがハンセン病資料館の学芸員であり、稲葉さん、大久保さんはそういう存在なのです。

おそらく生涯をかけて残すべき資料と向き合おうとしていたであろうお二人を考えると、心からの怒りが湧きあがります。解雇によって奪われたのは単なる仕事ではなく一人の人間が向き合おうとしている人生だと思うのです。

(木谷洋重)

ハンセン病資料館
不当解雇学芸員を支援する会



<https://against2020hansens-issues.info/>

against2020hansens.issues@gmail.com

◆ 応援して下さる方々へカンパのおねがい ◆

ゆうちょ銀行 〇一九(ゼロイチキュウ)店(019)

当座:0364317

名義)ハンセン病資料館 不当解雇学芸員を支援する会